

卷 頭 言 — 木簡よみの歴史 —

一九六一年、平城宮跡における最初の木簡出土によって、日本において本格的な木簡研究が始まるとともに、木簡をよむという仕事と、その仕事に専門的に従事する人たちが誕生した。木簡をよむという仕事は、古代史の知識を不可欠とする学問的な営みではあるが、根気と直感を必要とする点でどこか職人的なおいがするので、あまり堅苦しくなく「木簡よみ」という呼び名がふさわしいように思う。これまで木簡の研究史はまとめられているが、木簡よみの歴史について振り返られることはなかった。わずか四〇余年の間であるが、木簡よみにも技術的進歩があり、それに伴って木簡の読み方も変化しているので、それらのことを振り返ってみたい。

木簡よみの技術的進歩の画期となるのは、第一はEDTA試薬の使用、第二は赤外線テレビカメラの普及であろう。奈良国立文化財研究所では最初の木簡出土直後の六〇年代初めに、その後基準となる木簡の調査方法が確立された。すなわち写真撮影と調書作成であり、写真はキャビネ判による原寸大のもので、調書は記帳ともいい、木簡の見取り図を描いて材の欠損状況や墨書の遺存状況を書き込むことであり、いずれも出土直後の最もよい状態の記録を残すためである。このころの木簡調査の難題は、出土とともに材にしみこんでいる重金属イオンが酸化し、またたく間に木簡の木肌が黒く変わってしまうことであった。六〇年代終わりに、還元剤であるEDTA試薬の水溶液に浸して木肌を漂白する方法が開発され、この試薬の使用は木簡の読み方を劇的に変化させた。これ以前には、木簡が出土すると黒変しないうちに写真撮影と記帳を終えなければならず、夜を日に継いで急いで調査したそうであるが、これ以後には余裕をもって調査できるようになったのである。当時この試薬を「魔法の水」とよんでいたとか。私が奈文研に入所した一九七二年にはすでにEDTAが使用され、時間をかけて記帳を行な

っていた。

木簡よみの難しさの一つは、薄れている墨痕をいかに読み取るかという点にあり、私が先輩の加藤優さんに教えられたのは、水中の木簡にスポットライトの光線をあて、墨書面と光線の角度を変化させながら墨痕を読み取る方法である。おそらく一千年以上地中にある間に、材の表面に墨のニカワがしみこんだ部分としない部分の間で浸食差が生じてわずかな凹凸ができ、それが斜光線によって浮き上がって見えるのである。薄れた墨を読み取るために、当初から赤外線写真が用いられたが、七〇年代前半に浜松市伊場木簡で使用したのを早い例として赤外線テレビカメラが使用されるようになった。奈文研でも試用してみたが、先の肉眼で見する方法の方が有効だった記憶がある。その後赤外線テレビカメラは肉眼による釈読を確認するために使用されていたが、八〇年代末から釈読の上で比重を増してくる。それは一つには機器の性能が向上し、二つには八八年以降の長屋王家木簡、二条大路木簡などの膨大な量の木簡の出土に対処するためであったという。最近はこちらに性能が向上し、赤外線テレビカメラへの依存は高まっているかも知れない。性能の向上は望ましいことで、とくに老眼で視力の衰えた身にはありがたいが、この機器は万能ではなく、肉眼によって原物を十分観察することを前提に用いるのが望ましいのであろう。

人の面から木簡よみの歴史を見ると、この二つの技術的進歩の画期を境に、六〇年代初めから当たっていた人たちが木簡よみの第一世代、EDTA使用の六〇年代末以後の人たちが第二世代、赤外線カメラの普及した八〇年代末以後の人たちが第三世代といえそうで、世代ごとに木簡よみのスタイルが少しずつ変わっているように思える。

木簡の収納方法や保存処理方法も書き残しておきたいことであるが、ふれられなかった。今回木簡よみの歴史を調べてみて、確かな記録が少ないので、記憶や聞き取りに頼った点が多かったが、個人では十分行なえず、さらに広い範囲で関係者から聞き取りを行なう必要がある。そしてこれに関連して気になったのは、第一世代というべき人たちのなかに、すでに鬼籍に入った方がおられることであり、残された時間は多くないのである。

(今泉隆雄)